（ 様式D－２ ）
（ 別　　紙 ）

令和４年度　海外派遣研究員研究報告書

令和５年１０月１６日

日本大学理事長　　殿
日 本 大 学 学 長　　殿

所　　属　　法学部
資格・氏名　　教　授　田邉　陽子

令和４年度海外派遣研究員（中期）の研究実績を，下記のとおり報告いたします。

記

１　区　　分　　中期
２　研 究 課 題

英国・欧州の柔道コーチの競技力向上とスポーツの価値におけるコーチ行動に関する研究

３　派 遣 期 間　　西暦２０２２年８月１６日　～　２０２３年９月１０日
４　派　遣　先　　英国・バーミンガム，フランス・パリ，アイルランド・ダブリン
５　研 究 目 的

夏季オリンピック大会では 57 年ぶりの自国開催となった東京 2020 オリンピック競技大会においては，日本選手団の金メダル(27 個)，総メダル数(58 個)は，ともに過去最多を更新した。東京大会における好成績を一過性のものとせずに，今後いかに競技成績の水準を維持・向上できるかにより，我が国の国際競技力が問われている。このように国の競技力強化のための施策においては，ハイパフォーマンス統括人材の育成への支援強化も挙げられ，国際舞台で活躍できる世界トップレベルのコーチ育成にも重点が置かれている。

英国においては，2012 年ロンドンオリンピックの自国開催後のオリンピックにおいてもメダル獲得水準を維持しており，日本においても今後のオリンピックにおける競技成績の水準を維持・向上させることが課題となっている。

本研究では，国際的な視点に基づくコメントを受けて，さらに競技力向上とスポーツの価値における英国・欧州のアスリートを含めた柔道コーチ行動が必要となり，コーチの効果的な役割である，専門知識，対人知識，自己理解知識を中心にコーチ行動をタイプ別に分類し，国際的な視点に基づく競技力向上とスポーツの価値のための柔道コーチ行動の理論モデルの構築を確立し，今後のより適切なコーチ育成を実施するための知見を提供することを目的とする。

（ 様式D－２ ）

６　研　究　概　要

スポーツコーチングについてジャン・コテとウェイド・ギルバード（Wade Gilbert）（2009）は，効果的なコーチングとは「専門的なコーチングの環境において，選手のコンピテンスや自身，対人関係，個性を伸ばすために，専門知識，対人知識，自己理解知識を組み合わせながら，継続的に活用すること」と示している。

英国・欧州におけるコーチ行動の基盤として，コーチングのコンピテンスの認識と認定のためのヨーロッパの枠組み，(EFRCCQ: European Framework for the Recognition of Coaching Competence and Qualifications) スポーツコーチングの専門分野を成しているコーチングカテゴリーの分類がある。

トップレベルのコーチ行動に関する研究は，ジャン・コテら（1995）の質的研究を用いた，体操競技エキスパートコーチのコーチング・メンタルモデルを明らかにした。

コーチを対象としたコーチ行動の研究は，コーチング学や心理学など多数あるが，柔道コーチの競技力向上とスポーツの価値におけるコーチ行動に関する研究は未だ行われていない。

そこで，国際的な視点に基づく英国・欧州の柔道コーチにおける，アスリートを含めた柔道コーチ行動を専門知識，対人知識，自己理解知識を中心にコーチ行動をタイプ別に分類し，競技力向上とスポーツの価値のための柔道コーチ行動の理論モデルの構築を確立し明らかにすることで，今後の我が国の柔道コーチの育成に資するものであると考えられる。

研究計画・方法

英国・欧州の柔道コーチの競技力向上とスポーツの価値における研究計画では，練習場面と試合場面でのコーチ行動にてアスリートを含めた柔道コーチ行動の，国際的な視点に基づくコメントを入れながら構成する。

観察・インタビュー・アンケートを実施し，国際的な視点に基づく競技力向上とスポーツの価値における英国・欧州のアスリートを含めた柔道コーチ行動の英国・欧州の柔道コーチにおけるデータ収集と分析を行う。

分析方法は，専門知識，対人知識，自己理解知識の側面において，スポーツコーチング国際枠組み第 1.2 版にあるコーチングの知識を参考にし，インタビュー調査は 1 対 1 の半構造的，深層的，自由回答による内容をコード化し，Nvivo を用いた分析を行う。国際的な視点に基づく英国・欧州の柔道コーチにおける競技力向上とスポーツの価値のためのアスリートを含めた柔道コーチ行動を明らかにし，柔道コーチ行動を分析し複数のタイプの分類を行い理論モデルの構築を行う。

（ 様式D－２ ）

７　研究結果・成果

1. はじめに

最近の柔道コーチの競技力向上とスポーツの価値の研究では，エリートレベルでの柔道コーチングについて研究と開発が行われている。優れたパフォーマンスを発揮する柔道アスリートは，コーチの指導のもとで投げ技や組手の技の卓越性など，さまざまな技術的および戦術的行動の知識と習得を達成する必要があることが証明されている(Smaruj & Laskowski, 2014)。例えば，柔道の投げ技には 68 本の技があり，そのうち手技は 16 本，腰技は 10 本，足技は 21 本，真捨身技は 5 本，横捨身技 16 本が含まれている。パフォーマンスの高いアスリートの要件や要求を満たすために，コーチは知識の探究に取り組んでいる。つまりコーチは遭遇する問題に関する情報を探し，新しいアイディアを「常に探している」と報告されている(Reade, Rodgers, & Hall, 2008)。

コーチたちは継続的な専門能力開発(CPD: Continuing Professional Development)を進める際に直面する障壁として，知識の探究に必要な時間を見つけるが難しいことと，スポーツ科学の専門家に直接アクセスできないことを示唆している。現在のコーチングの CPD モデルは，初期のキャリアのコーチ向けのより模範的なモデルに焦点を当てている傾向があり，より経験豊富なコーチ向けに，より個別化された柔軟なアプローチを取ることを検討する必要があると述べている(Nash et al, 2017)。

個別化されたアプローチには，専門知識・対人知識・自己理解知識の側面を中心に自分自身の役割の重要な要素に対するコーチの自信をより深く理解しコーチが直面している課題のいくつかを調査することが必要である。

2. 調査実施

試合・合宿・道場を訪問し，柔道コーチと柔道アスリートに対して，観察・インタビュー・アンケートを実施した。国際的な視点に基づく競技力向上とスポーツの価値における英国・欧州のアスリートを含めた柔道コーチ行動の英国・欧州の柔道コーチにおけるデータ収集と分析を実施した。

アンケートを行った参加者は，柔道コーチと柔道アスリートの 158 名であった。
そのうち柔道パフォーマンスコーチは 61 名(Male: n = 48, Female: n = 13)であり，17 名がオリンピック・パラリンピック，世界選手権大会，欧州選手権レベルで柔道選手を指導した経験があるコーチ。14 名は国際大会を指導したコーチ。5 名は国内シニア・ジュニアの強化を指導しているコーチ。7 名はホームネーションプログラムのコーチ。4 名はパフォーマンスパスウェイのコーチ。14 名はクラブコーチであった。
この研究に参加した柔道アスリートは 97 名(Male: n = 55, Female: n = 42)であり内訳は，17 名がオリンピック・パラリンピック，世界選手権大会，欧州選手権のアスリート。25 名は国際大会のアスリート。33 名が国内シニア・ジュニアの強化アスリート。14 名はホームネーションプログラムのアスリート。1 名はパフォーマンスパスウェイのアスリート。7 名はクラブアスリートであった。

アンケート調査の質問項目は，年齢/性別/段位/パフォーマンレベルといった基礎項目と，英国コーチングフレームワークに基づいた 15 設問の構成にてパフォーマンに関連した行動評価の項目とした。15 設問のそれぞれに関しては，「どの程度重要であるか」「どの程度自信があるか」の 2 つのセクションを設け，15 設問を Physical development ,Understanding you, Psychological preparation , Relationships, Skills の 5 カテゴリーに分類した。回答方法は 7 段階として「1＝まったくそうではない」「7=非常にそうである」とした。

統計解析では，すべての統計処理には，SPSS を用い 15 設問を行った。

インタビュー調査は，半構造的インタビュー法を用いてナショナルコーチ 2 名/ナショナルアスリート 2 名に対して 5 カテゴリーの行動についてインタビューを行い，分析を行った。

3. 結果と考察

効果的なコーチはパフォーマンスに関連する主要な構成要素に対して高い自己効力感を示す必要がある。競技力向上とスポーツの価値における効果的なコーチ行動には，さらに必要な重要要素に関して検討する価値のあるトピックスである。

Smaruj, M. A. M., & Laskowski, R. (2014). A Technical and Tactical Profile of the Double Olympic Judo Champion: A Case Study. *International Journal of Sports Science & Coaching, 9*.

Reade, I., Rodgers, W. and Hall, N., 2008. Knowledge transfer: How do high performance coaches access the knowledge of sport scientists?. *International journal of sports science & coaching*, *3*(3), pp.319-334.

Christine Nash, John Sproule & Peter Horton (2017). Continuing professional development for sports coaches: a road less travelled, Sport in Society, 20:12, 1902-1916.

以　　上